

音楽の隠し味 Op.8

このコーナーでは、作曲家や有名曲の意外な一面を知ること
でクラシック音楽をより楽しめる「隠し味」をご紹介します。

ピアニスト 白川 優希

第8回目はドビュッシー(前編)です。

19~20世紀にかけて活躍したフランスの作曲家です。彼はこれまでに使われていた西洋音楽のルールに疑問を持ち、独自の表現を編み出しました。作品の楽譜表紙に葛飾北斎の浮世絵を使用した事から、日本でも特に愛されている作曲家のうちの1人です。また、1980年には20フラン紙幣に彼の肖像が印刷されるなど、フランスといえばドビュッシーと言っても過言では無い程代表的な文化人です。彼の波乱万丈な人生を語るには紙面のスペースがあまりにも少ない為、第8,9回目連載と2回に分けてお話しします。皮肉屋で内気、決して良いとは言えない性格は、何十年経ってもつい吸い込まれてしまうような魅力に溢れているのです。

彼の楽曲はクラシック音楽の中でも特に異彩を放っています。「全音階」という、その時代までにはあまり使用されていなかった作曲方法を使っているからです。今でこそ高い評価を受けていますが当時はなかなか理解される事はありませんでした。

今回の音楽の隠し味は、ドビュッシーの「コンクール歴」です。

ドビュッシーは8才からピアノを始めました。ピアニストになるには少し遅いと言われている年齢ですが、メキメキ上達して、たった1年間で音楽院のピアノ試験が受けられる程の腕前になります。はじめはピアニストを志しますが、その後7年間良い成績を収めることは出来ませんでした。

そこで、ピアノに見切りをつけ、彼は作曲家を志す事にします。彼が曲を作る上で一番大切に考えたのは「自分の耳」です。クラシック音楽には様々なルールや形式があり、これまでの作曲家は模範的でミスが少ない作曲をする事が大前提にありました。稀に遊び心としてルールを守らない事はあっても、骨組みは守っていないと評価されにくい時代だったのです。

しかしドビュッシーは、あえてミスを連発します。当然学内での評価は悪く、「どうしてこのような事をするのか。この音を君は美しいと本当に思うのか?」という師の問いに対し、「ええ、きれいだと思いますとも!」と言いました。彼にとって理論なんてものは無く、聴いて快いということが一番のルールだったのです。



ドビュッシー

※参考文献

作曲家別名曲解説ライブラリー(1993)『ドビュッシー』音楽之友社、ドビュッシー/平島正郎訳(1996)『音楽論集』岩波書店、青柳いつみこ(1997)『ドビュッシー=想念のエクトプラズム』東京書籍株式会社、松橋麻利(2007)『作曲家◎人と作品 ドビュッシー』音楽之友社

さて、当時のフランスで正統的な作曲家になる為には必ず通らなければならないと言われている狭き門があります。「ローマ賞」です。パリ音楽院作曲科の内部的に行われるコンクールで、時間内に課題をこなし審査員に認められれば、ローマ賞授与の栄誉とイタリアへ最大4年間の留学が与えられるものでした。

コンクールはかなり過酷なもので、予選をクリアした通過者は、狭く薄暗い屋根裏部屋に押し込まれます。そして、25日間ひたすら作曲に打ち込むのです。受験者が集中したい時間に限って、向かいの教会では結婚式が行われ大音量で音楽が流れてくる始末。結婚式中の新郎新婦に向かって、屋根裏部屋の住人達はワー!ギャオー!と奇声を発する程厳しい戦いでした。

ドビュッシーはこのコンクールに3回出場します。1回目は予選落ち、2回目で本選二等賞、3回目でやっとローマ賞を受賞します。

せっかく受賞した作品ですが、彼自身は気に入っていませんでした。何故なら審査員受けする様に自分の耳を頼りにするというルールを曲げ、型へはめ込むよう妥協したからです。後に彼は「コンクールは絶対に有害なものだ。何の賞を取らずとも完璧な音楽家になっている人もいる。」と話しています。しかし、彼のコンクール受賞歴が仕事に影響したことも事実でその後は目覚ましい活躍をみせました。

ドビュッシーはローマ賞を獲った事により、作曲をする上での「正解」を書けるという事を証明しました。しかし、彼は創作の上で「正解」を書きたがりませんでした。既存のルールよりも耳で聞いた美しさを優先させたかったからです。適当に自分の耳だけで創作している事と、答えを知っている理論も分かった上で音の選択をしている事では大きく違います。

理論を知った上で敢えて崩しているからこそ彼の作品は素晴らしく美しく、独特な曲ばかりなのです。

ドビュッシーの「コンクール歴」は作品の隠し味となっているのではないのでしょうか。

① おすすめの一曲

ドビュッシー / 牧神の午後への前奏曲

この曲はマラルメという詩人の「牧神の午後」という詩に寄せて書かれました。牧神とは山野と牧畜を司る半人半獣の神のことで、その神が眠りから覚めたところから始まります。夢なのか現実なのか行ったり来たりする様子が見事に音楽によって描かれていて、思わずため息をついてしまう程美しい作品です。『debussy faune』で検索するといくつかの音源が見つかるので是非聴いてみてくださいね。



白川 優希 Yuki Shirakawa

横浜市立南高等学校普通科卒業。桐朋学園大学ピアノ科卒業。これまでに井上節子、川島伸達各氏に師事。阪急交通社「たびコト塾」有料音楽講座にて講師兼演奏。

メディア

- ・NHK BSプレミアム 特別ドラマ「黒蜥蜴 ~BLACK LIZARD」ピアノ演奏。
- ・テレビ朝日系列「はじめまして、愛しています。」ピアノ監修。
- ・フジテレビ系列「世にも奇妙な物語「シンクロシティ」」ピアノ協力(自身出演・演奏)。